



保姆の注意す可き事項

中村 五六

一方便を目的と誤認す可からず
 世には一事業の目的と之を達する爲め方便とを混
 同したり若くは方便を以て目的と誤解するものが
 尠くない。之を幼稚園事業に就て見ても唯恩物を
 與へたり、唱歌を授けたり、遊戯を爲せるのを直
 に其目的として敢えて幼児心身の發達狀況如何を
 顧みないで甚しきは其施す所の方法をも解せず、
 爲に却つて多大の悪影響を與ふるものが少くない
 様である。憂ふ可き次第である。故に保姆たるも
 のは先づ平素期する所の目的を定めて其目的を達
 するには如何なる方法を執る可きかを了解しなけ
 ればならぬ。即ち保姆はまづ保育上適切な目的を
 有し、之を達する方便を考へなければならぬの

である。

二 幼児の思想の範圍を明知す可し

幼児の思想は漸次に發達して次第に其範圍を擴張
 するものであるのに其程度を計らず、唯保姆自
 身の考で以て種々の事項を授けたのでは多くは
 幼児思想の範圍外に逸してしまつて、爲めに幼児
 には馬耳東風で寸効もないか若しくば知らず識ら
 ずの間に幼児に對して抑壓を試みて害惡を與ふる
 ことがないとも限りません。故に保姆たるものは
 能く幼児の思想の範圍を知つて居て之に應ずる訓
 育を施すことに注意しなければなりません。

三 幼児の相性に注意す可し

幼児發達の度に應じて之を數組に分けて、保育を
 施すのは通常のこととて、そして此一組を恰も一個
 の人の如くに考へて之に保育を施すのは一の便法
 で利益のあることは云はでもの事で、今日一般の
 學校が級別制を取つて居るのは全く此利益に因る
 のであります。然れども之を一方から見ると各個

の幼児に注意しつゝ、各自に適切な訓育を加へると云ふことに就ては何うも劣る様にかゝる。一體級とか組とかに分けて同時に教育すると云ふことは年齢が長ずるに従つて其利益が多いのですが幼少のものに對しては其効が少いものであります。且つ幼児の自然の状態に就て考へて見ると其組をなして居る數は三五名若くは七八名に過ぎない。それが小學時代になると稍其數を増して來、中學時代になつて始めて數十名の團體を造つて遊びを共にするのである。然るに幼稚園で無理に數十名の幼兒を一組として常に之を一人の如くに取り扱ふのは其自然に反するものと云はなければなりません。一室の中に數十名の幼兒を收容すると云ふことが設備の點から來たとすれば、尙一層幼兒の個性には注意に注意を加へて此級制上からの缺點を補ふ必要があるでせう、殊に幼兒中に特別な性質があるものなどは尙更之に相應した取り扱ひをしなければなりません。

四事の輕重を明にす可し
 幼兒の性質は純粹無雜であるから之に教育を加へるに當つては、能く事の大小や輕重を辨へて濫に之を賞したり、輕々しく之を罰すると云ふ様なことがあつてはならぬ。又大事に疎で小事に密にすると云ふことでもいけぬ。故に些細の事に對しても其根源を明にし結果を察して教育的の効果を收める様に處置しなければなりません。従つて保母から命ずること、幼兒の意に任すこと、の別を判然して長上の命令を遵奉し、他人に對しては好意を以て接する様な習性を養ふことを務めなければなりません。

五無用の干渉を避く可し
 幼兒の諸能力の發達と云ふものは、總て自己の活動から出て來る遊戯に因るものであるから、其發達を見様と思ふならば幼兒を或る可く自由に遊戯させて決して其活動に掣肘を加へてはならぬものである。且つ幼兒と云ふものは勢力の結果に對し

てよりは活動其ものにあるのであるから之に安りに干渉すると云ふことは假令夫れが一層の好結果を得様とする爲であつても避けなければならぬ。此様な遊戯は其利益は決して幼児にのみでなく保母の方に取つても多くあるものです。何故と云ふに此自由遊戯の際には幼児は各自の好む所、欲する所を爲して能く其性質を表示するものであるから、之を觀察するのに最良の機會となるからでありませぬ。

六遊戯と代仕との別を辨ふ可し
凡そ遊戯と仕事とは其原は何れも活動です、唯遊戯と云ふものは活動其物の目的として居るけれど仕事は之に反して活動の結果を必要のものとする所で兩者は大なる差異を生じます。即ち仕事は活動の結果と云ふものを尊ぶから、自然幼児の自由を掣肘して難事を強ふるから、従つて多少苦痛を感ぜしむることがあるのです。故に名前は仕事でも其作業が單に幼児の興味を刺戟するに止まるな

らば亦遊戯と云ふことが出来ませぬ。

七年齡の差は其價大なるを思ふ可し。

幼児の年齡の差は一ヶ月と云ひ一ヶ月と云つても大人の一月や一年などは數理上は其價が非常

に大きいと云ふことを知らなければなりません。

即ち年齡三年或は五年のもの間の一年の差と云

ふものは三十才四十才乃至は五十才位な人の間に於ける一年の差などは決して同日に見ること

は出来ないものであります。斯る譯で幼児と云ふものは年齡に應じて其發達に著るしい差がある譯であります。然るに世上一般の人はまだ此區別に對

す注意が薄すいのは嘆す可き次第であります。

八幼兒を取り扱ふ方法は敏速なる可し。

幼兒は其性質として、一事一物に注意を傾けると云ふことは出来ないけれど、絶えず諸種の事物に

注意して倦むことのないものであります。保育者は此具合を心得て其實施の方法が敏速で、幼兒の

急速な心の轉換に伴ふことが出来ないで何時も幼

急速な心の轉換に伴ふことが出来ないで何時も幼

急速な心の轉換に伴ふことが出来ないで何時も幼

急速な心の轉換に伴ふことが出来ないで何時も幼

急速な心の轉換に伴ふことが出来ないで何時も幼

兒の後を逐ふ様になつて、幼兒の心が既に他に移つて居る頃に強いて之を此方に向け様と云ふことになるから表面は幼兒の不注意と云ふことでつまりは保母の徒勞となるばかりである。故に幼兒を取り扱ふには能く後敏速な性質に應じ其精神活動をの機に乗じて之を左右する機敏と熟練とを具有しなければならぬのです。

九幼兒心身の運用は普編なるを要す。

幼稚園保育の目的と云ふものは畢竟幼兒の圓滿な發達と云ふ所に在るのですが斯る發達は諸心力の普偏な運用によつて始めて遂げられ可きものであるから精神諸力及身體各部を偏重なく運用せしむ可きは勿論の事と云はなければならぬ。然るに世間には保母の指示誘導するに當つて、却つて偏重の運用を爲さしむる事實が尠くない。例へば或る手技を授けるに當つても單に視覚に訴へることがあり、遊戯に於ても終始同一の運動に限る様なことがある、幼兒が隨意に製作遊戯に従つて居ると

きは自然の命によつて身體各部を動かして諸種の感化や心力を用ふるものであることは注意深き觀察者の常に認めて居る所である。世人が動もすると不良の保母に對して寧ろ其幼兒を放任して置いてほしいと云ふのは主として斯る弊があるからである。

十幼兒に其社會の一員たるの念を抱かしむべし
幼兒の既に幼稚園に入つて來た時には一個人であると同時に當社會の一員であるから相倚り相助けて互に親愛して社會の結合を固くして一般の利益を思はせなければならぬ。即ち年長者は自己の有用なることを認めて満足を感じずるし少弱なものは自ら順従の幸福なことを知つて終始快樂喜悅の間に仁愛、正義、從順尊敬、忍耐、勤勉等の諸徳を養ふことが出來て遂に忠良の臣民たるの資を得ることが出来る。

十一幼兒の交際は隱微の間に勢力の大きいものであることを忘れてはならぬ。

幼兒をして其友に對して親切好意を以て相交り、
 自然に存する主義の情を制し若し殘忍野卑の所業
 があつたら之を匡して温和優美の行儀となし又卑
 屈怯懦の精神があつたらば之を矯めて不撓有爲の
 氣象を養成せしめると云ふことは幼稚園に於て務
 む可き所でありませぬ、然れども幼兒が相接した時
 には其効があると同時に又弊害も生ずるものであ
 る。然も其効力も弊害も實に隱微の間に大勢力が
 あるものでず。故に幼兒は知らぬ間に其性行が著
 るしく善良に向ふことがあり、或は不良に向ふこ
 とがあります。是等は其原因は保母の誘導ではな
 くて却つて其知らない間に幼兒相互の間に生起す
 ることが往々あります。故に平素周到な注意を以
 て幼兒交際の影響を精察して所謂保育課目の外に
 於て保育の効を擧げることには注意しなければなり
 ませぬ。

十二幼兒の取扱 上特に男女の別を設くるの要な
 し。

凡そ爲の發達の初歩と云ふものは其性質も行動も
 同一で發達の程度高くなるに従つて漸次分離して
 互に差別を生ずるものであります。幼稚園時代の
 幼兒にあつては其考ふる所も其の爲る處最も男女
 に依りて異なる事はありませぬ。故に之を誘導する
 に當つても同一の目的、同一の方法で澤山です。
 故に男兒には許して女兒には許してならぬと云
 ふこととはないのです。尤も男女の天賦を云ふもの
 がありますから多少其趣きが違つて來るのは自然
 に一任して充分です。彼の從來世俗に行つて居る
 様な男女の格段な區別は却つて兩者の區分を極端
 ならしめるもので男は益々粗暴に女兒は益々卑屈
 に陥る様になるものです。

